開館30周年記念事業×令和6度共催講演事業

連続講座『かりそめのひとりごと』はおもしろい

令和6年11月9日 於熊取図書館

『かりそめのひとりごと』の和歌と漢詩

大阪観光大学非常勤講師 新稲法子

1 『かりそめのひとりごと』に記された中盛彬の和歌

以下、『かりそめのひとりごと』のテキスト、中盛彬肖像画は和泉文化研究会編『和泉史料叢書』第1、一九六七年刊による。

『加 李 曾米能飛登利吳止』

影印は季

一 序言

一首

五七 塩屋王子 後半の漢文が跋文に当たる

一首

『続伽里素免乃比登利棋趾』

五八 続編序言

和歌なし

八八 続編の跋文

一首

『続後伽利曾米濃比登理語趾』

八九 続後編の序

一首

一一一 続後編跋

二首

『拾遺伽利曾米乃飛登李吳趾』

一二二 拾遺の序言

十四首

一六一 拾遺編跋

二首

中盛彬は『かりそめのひとりごと』の執筆を開始、終了するたびに、自らの近況を交えて感慨を詠んでいる。計二十二首。

八九 続後編の序

王充が論衡七十六篇を著はして、おのれが伝へをさへ書加へたる心の内いかばかりかはおかしかりけん。謝豹が人に知られざらんことを思ひて、その光を包む葆ぬる心ざし又いかばり楽かりけむ。彼にしたがはむと思へば、かどのくらぶべきなし、これにははんとすればくだかけのおもひになきてかくるゝよしなきをいかにせむ。昌斯もとよりすることなかりき、ふみを開いてぞ命を落しぬ。卞和かつて罪あらず、玉をいだきて叙そこなはれぬ。人の道ちふことをあげつらふは、心あるわたりのことなりわぎ・ちから・をふるまふは、かどあるものゝよくすることなり。共にしれたるはなみには、いかでふるはむ。たゞ人の忘れてすたりぬる草々の古き跡を、ひろいたゞし珍らかに、世におかしき、今のことをも尋ね蒐め書のこして、なからむ後の露の玉と曾孫らに忍ばれむほどは、なにかは苦しかるべきと、思ふものから、そをだに博くさぐらむことのかたければ、あが国にかりつらへる限りを一つ二つ書蒐めて、先に「かりそめのひとりごと」ふたまきをしるしぬ。

○王充 (27～97) 『論衡』三十卷に自紀篇第八十五がある。

○謝豹 『西陽雜俎』によると、土の中に住んでいる蝦蟇に似た丸っこい動物で顔を覆っているような格好をしている。恥を抱いて死んだ人間が生まれ変わったものという。

○かど 才能

○くだかけ にわとり

○卞和 春秋時代の楚の人。玉の原石を楚の厲王に献じたが、信じてもらえず足斬りの刑に処せられ、左足を切られた。武王のときにも献じたが、同様に右足を切られた。文王が位についたとき、これを磨かせると、見事な玉であったので、「和氏の璧」と称し楚の宝とした。

今年卯月末の四日より、吾こそ熱いでぬとて、やからみなのもしる内に、いもにうつりてうつくしく、はりいでぬ。この病ひは、天平かなる七つの年より始めて、世におこなはれし後は、ひなも都ものがるもの多からず。たれもふりこし道なるぞ、よくみとれひきでも、よくせむずると云うに、おくも、おもてもねると、くらふとを忘れおろそかならず。みとるうちに膿もうつくしく、つらぬきてなにつまがもなく、さつき七日残りなくむすびおさまりぬ。

○いも 疱瘡。天然痘。

橋南谿(宮川春暉)著『疱瘡水鏡録』1781年(京都大学附属図書館 富士川文庫)

第三階

痘ノ形円ニシテ中高ナルハ形ノ神有ルモノ也。蚊ノ刺タルロノ如ク蛇ノ腹ノ如ク雲ノ乱ル、カ如キモノハ形ノ神無キモノナリ。痘ノ色、春花ノ露ヲ帶カ如クニシテ秋草ノ霜ヲ經ルカ如クナラス、紅白分明ニシテ光活潤沢ナルハ色ノ彩有ルモノナリ。枯骨ノ如ク赤豆飯ノ如キモノハ色ノ彩無キモノナリ

第六階

快ク十分ニ膿ニ成リ痘色蒼蠟色ニサヘナレハ大事定ル安心スヘシ。

第六階

膿サヘヨクカ、レハ其アトニテ大ガイノ悪症出ルトモ命ハタスカルモノソ内ノ毒大ガイ外へ出タレハ内攻ユルキカ故也。

おなじなかの三日といふ日、うからやからをつどへて、祝ひかたの如くとりおこなひ酒くみかはしたるにえひしりた。吾つかれていふたつばかり皆々寝ぬ。わもまなびの窓をとぢ、おしまずきによりかゝりしが、あまりのうれしさに、いもねられずつくゝと、こしかた行く末を思ふに、おのづからなるあめのさがより、人のつねの心さへに、心にうつりこゝろばせに、そひきつゝ空とひとつに澄渡れば、さらば又かの続後を、かゝむと思ふに、蛍の三つ二つ飛び行くも、いやこゝろありがほなり。

於孤多利乃麻杼登志礼婆也与利もこ伝与波の保多留農登遠九ゆく良牟
と口吟みしも、かのくだかけのあまれる声にして、なほひとわらへなるべしや。

立川昭二著『病いと人間の文化史（新潮選書）』新潮社 1984年

「IV病いのフオークロア」

疱瘡神は、このように痘瘡除け、つまり痘瘡予防の信仰神としてまつられたが、痘瘡にかかる、その疫神をはらうために、疱瘡神をまつるいわゆる「疱瘡祭」が、さかんに行われた。甲斐（山梨県）の医師橋本伯寿は『断毒論』（文化七、一八一〇年）で、民衆が疱瘡神を信じ、痘痛の患者が出ると、患家に集まってこれをまつり、贈物を交換する風習が流行していたさまを、次のように語っている。

甲斐の国は近来、痘神を祭ることわけてはなはだしく、痘瘡六日にあたる夜より、親族縁者はもとより夥しく人を招き、僧・社家・修験者を講じ、赤白の紙をあまた切りまぜて神棚を飾り、祭りさざめき、親族知音よりおもひく／＼に当世の錦絵、干菓子、餅、酒あるいは絹布、衣類など贈りきたるを、痘瘡病の寝処のあたり処せまくまで飾りかけて、その品の多きをその家の面目とす。また十二日にあたる日を棚上げと称て、前のごとく人を招て饗応し、贈ものを遣はし、家々へ残りなく強飯を贈りつかはす国中の風俗なり。家々にて我おとらじと祭りさざめく風俗なれば、痘瘡流行の年々、国中の費は計りしるべからず。この事次第に増長して、神棚の飾りやうもおもひく／＼に工夫をこらし、その家の分限をも回顧ず、質種借用の操にて、その時の費はしのげども、つひにはその年の年貢にさへ苦にいたる。

○於孤多利乃 麻杼登志礼婆也 与利もこ伝 与波の保多留農 登遠九ゆく良牟

●中盛彬の和歌に対する姿勢

桑原恵『幕末国学の諸相 コスモロジー／政治運動／家意識』大阪大学出版会 2004年
「補論 近代化過程における「家」と「自己」一家訓としての地域史」

このような意識（新稲注 地域の歴史を通して降井家の歴史を振り返り、降井家の者としてとるべき行動規範を子孫に伝えることを意図して「かりそめのひとりごと」を記した中盛彬の家意識）は彼の和歌に対する考え方にも通じており、彼は和歌に実情を込め言葉を正しく結んで詠めばその和歌が時空を超えて読者の眼前に事物を現出させるとまでいいながら、一方では「歌ハもと小伎也。深く耽溺すへからず。たゞ時に当りことに触ておもひをのふるまでに学ひて足ぬへし。いにしへ歌に名たかき人の集ともをミて其道に精神を尽しぬるを感じるにつきても、その外のことハさこそ拙かりけめとおもひ知らるゝ也。実朝公か歌に執着して身も家も失ひたまひしハ武士の統領に換むとこゝろさし給ひしにやと、おもハれていとかひなし。賢哲英邁の豪傑に古今歌の名人ハ聞えぬをや」や「人皆本業本職あり。余力によめるうたならバ、心得有ルべき事ならむ。歌ハ必よむべし。歌人とハなることなかれ。」（新稲注 以上、『うたのふみよむひとりごとほどこぎぶみ』の引用）と述べて、武士は和歌を詠むことに心酔してはならないことを強く述べてもいる。

2 『かりそめのひとりごと』と大田南畝の漢詩

『続伽里素免乃比登利棋止』続編序言頭注
父の八十の賀の書画展覧会を開きその目録を刊行す

4321 雲州中盛彬家翁八十寿詞 雲州の中盛彬の家翁の八十の寿詞
大社祥雲映綵衣 大社の祥雲 綵衣に映じ
斑斕五色借光輝 斑斕の五色 光輝を借る
樽前自有常珍饌 樽前自ら常珍の饌有り
高唱南山望翠微 高く南山を唱うて翠微を望む
文化十四年の作、『南畝集』二十（『杏園詩集』卷六）、『大田南畝全集』卷五卷
439 頁

○南山 終南山。「南山之寿」は長寿を祝う言葉。（『詩経』小雅 天保）

福田安典 「上方から見た大田南畝」二〇二三年度日本近世文学会春季大会シンポジウム